

動物用抗菌剤研究会の設立以来の経過概要ならびに事業内容の概要

平成12年5月
高橋 勇(前理事長)

本会は本年度で発足以来28年目を迎えた。筆者は昭和48年に本会が発足して以来、これまでの間に事務局長として、次いで理事長として、微力ながら本会の発展のため尽くしてきた。後進にバトンを渡したこの節目にあたり、本会がこれまで歩んできた道程を集大成しておくことも必要であろうと考え、以下その概要を述べることにした。今後これを礎石として、後進の方々のご協力により、本会が一層の発展を遂げるよう祈ってやまない。

なお、本会がここまで発展し、以下の事業を達成できたのは、諸先輩の先生方のご指導とご鞭撻ならびに歴代の役員・各種委員会の委員・特別講演やシンポジウムの演者と座長等の各先生方、その他多くの方々ならびに賛助会員各団体等のご協力とご支援があったからにはほかならない。この機会に改めて深甚の謝意を表する次第である。

A. 本会の設立以来の経過概要

1. 昭和48年4月：本会は、家畜の薬剤耐性菌が当時畜産・公衆衛生の両面から大きな問題となり、重要性が高まってきたので、当時この問題について検討していた7、8名からなる研究グループが母体となり、世話人代表に川島秀雄氏、世話人に柴田重孝氏はじめ、獣医学関係主要機関(大学、研究所、農水省、地方庁など)の代表者が参集、協議の上「家畜の耐性菌研究会」の名称の下で発足した。理事長には川島秀雄東京農業大学教授が、また、理事(25名)および監事(1名)には各機関を網羅した代表者が就任し、事務局は日本獣医畜産大学獣医微生物学教室(担当：高橋 勇理事)に置くこととなった。

2. 昭和48年9月：臨時総会において新理事長に小堀 進日本大学教授が選任された。(在任

期間：昭和58年までの10年間)。なお、初代の川島秀雄理事長は就任2カ月後の6月に急逝されたので、6～9月の間は森本副理事長が代行した。

3. 昭和49年4月：第1回シンポジウムを開催した。シンポジウムはこれ以降、小委員会において時宜に適したテーマを選定のうえで、毎年春に開催しており、平成12年が第27回である。なお、毎回シンポジウムの際に特別講演として、会員の参考になる重要な課題について各専門家に講演を依頼している(それらの演題名は別添資料として本稿文末に掲載)。

4. 昭和49年4月：動物用抗生物質・合成抗菌剤略語表、薬剤耐性菌文献リスト(1970～73)、薬物残留に関する文献リスト(同)、並びにこれらに関する参考資料(総説などの別刷)の4点を作成し、会員に配布した。なお、以後略語表は継続して毎年、文献リストは平成11年度まで毎年、参考資料は必要に応じて、その都度発行してきた。

5. 昭和51年：獣医学領域における細菌の薬剤感受性測定法の標準化は本会の重要な使命の一つである。そこで、まず大腸菌やブドウ球菌の一般細菌を対象とした測定方法について小委員会を結成の上、原案を作成し、理事会の議を経て本会の標準法として、日本獣医師会誌(29巻2号、90～92頁、昭和51年)に公表した。さらに、これ以降も逐次、動物由来のマイコプラズマ、ウレアプラズマほか3菌種について、委員会やシンポジウム等で検討のうえ、測定基準を作成し、本会会報に公表した(後述のE.3の項を参照)。

6. 昭和54年4月：会則を一部改正し、会の事業に家畜への抗菌剤の応用上の問題点も加えることとした。

7. 昭和55年2月：これまで懸案となっていた「家畜の耐性菌研究会報」第1号を発刊した。その内容は第6回シンポジウムの講演内容の詳細記事とともに、会務報告も併せて記載した。会報は以後も毎年発行し、第6号以降は動物用抗生物質・合成抗菌剤の略語表を毎年増補・改定したものを添付することとした。なお、会報は平成12年3月現在で第21号に達している。

8. 昭和58年4月：総会において新理事長に柴田重孝麻布大学教授が選任された(在任期間：平成3年までの6年間)。なお、小堀 進前理事長は病氣療養中のところ、同年6月に逝去された。

9. 昭和58年4月：会名を「家畜抗菌剤研究会」と改称した。同時に会則も一部改正し、会の事業にこれまでの家畜の耐性菌問題の検討と併せて、家畜への抗菌剤の適正使用の問題を正式に取り上げ、以後、これら2本柱で進めることとした。

10. 昭和60年4月：第12回シンポジウムで、薬剤の応用面に関する新企画として「最近開発された家畜の細菌性呼吸器病及び消化器病用抗生物質の基礎面と応用面」のテーマで、新開発薬6種についての講演を実施した。これ以降も随時同様の企画を実施することとした(後述のE.1.d)の項を参照)。

11. 平成3年4月：総会において、新理事長に高橋 勇日本獣医畜産大学教授が選任された(在任期間：平成12年までの9年間)。会則の一部改正の上、名誉会員兼顧問として柴田重孝前理事長及び春田三佐夫前副理事長を、名誉会員として大熊俊一前監事が推挙された。

なお事務局は、これまでと同様、日本獣医畜産大学獣医微生物学教室(担当：澤田拓土理事)におくこととした。

12. 平成4年4月：本会の事業の柱の一つに水産関係の問題を取り入れるため、会名を「動物用抗菌剤研究会」と改称し、会則の一部を改正して、会名、目的、事業内容、対象会員を畜産領域のみでなく、水産領域も考慮に含めたものとしたこととなった。

13. 平成6年8月：動物用抗菌剤の臨床評価に関する検討委員会を発足させ、検討を重ね、その結果を「動物用抗菌剤の臨床試験実施基準(試案)Ⅰ、Ⅱ」としてまとめ、会報第18号及び19号に掲載した(後述のE.4の項を参照)。

14. 平成11年9月～12年4月：新規事業委員会(委員12名)を発足させ、事業内容の検討を行った。4回の委員会で次の3つの新規事業が企画され、理事会、総会の議を経て、平成12年度から逐次実施することとなった。その内容は、①犬、猫における抗菌剤の使用実態調査(特に耐性菌)、②動物用抗菌剤耐性菌の公衆衛生に及ぼす影響の検討、③動物用抗菌剤マニュアル(理論と実際)の出版の3点である。

15. 平成12年4月：総会において新理事長に小久江栄一東京農工大学教授が選任された。また顧問として高橋 勇前理事長及び鈴木 昭前副理事長が推挙された。

なお事務局は引き続き日本獣医畜産大学獣医微生物学教室(担当：片岡 康理事)におくこととした。

B. 本会の目的及び事業(会則より抜粋)

(目的)

第2条 本会は動物用抗菌剤(抗菌性物質)の基礎面と応用面並びに薬剤耐性菌(以下耐性菌と略称)に関する研究調査、知識および技術の普及を行い、動物の衛生ならびに公衆衛生上の問題点を検討し、もって薬剤使用の適正化を図り、畜・水産振興に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するため次号の事業を行う。

1. 動物の抗菌剤の基礎的ならびに応用上の問題点に関する検討および文献、情報の収集。
2. 家畜・家禽・魚類等の耐性菌の実態調査ならびに耐性菌出現機序およびその防止策の検討。
3. 細菌の薬剤感受性および耐性菌に関する文献、情報および菌株の収集。
4. 細菌の薬剤感受性および耐性菌に関する検査技術基準の作成。
5. 抗菌剤の畜・水産物への残留に関する文献、情報の収集。
6. 関連学会および専門家との交流。
7. 上記各号における事業の成果については講演会、研究発表会の開催および参考資料の配布等を行い、その知識技術の普及をはかる。
8. その他本会の目的を達成するために必要な事業。

C. 本会の会員数(会費納入者数)

平成11年度は個人会員170名、賛助会員22団体となっている。なお、個人会員の分布は、大学、官庁、地方庁、団体、会社、開業その他にわたっている。

D. 本会の財政状況

平成11年度の決算を例にあげると、収入は個人会費収入額が510,000円、賛助会員会費収入額が440,000円、その他(シンポジウム参加費が主体)が467,992円、総計1,417,992円であった。即ち、個人会費収入は約36%止まり、賛助会費・その他の収入が約64%を占めている。

一方、支出では、事務費が10.9万余円(約7.7%)、会議費(総会、専門部会会議費等)が4.1万余円(約2.9%)、事業費(会報発行費、資料配布費、講演会費等)が118.6万余円(約83.6%)、その他(繰越金)が8.0万余円(約5.7%)であった。即ち、大半を事業費が占め、中でも会報発行費が67.2万余円(全予算の約47.4%)と半分近くを占めている。

E. 本会が過去27年間に実施してきた主な事業

本会がこれまでの27年間において、前記会則第3条第1～8号に示されている各事業について実施してきたものを具体的な項目別に整理・要約して示すと次の通りである。

1. シンポジウムで取り上げた

抗菌剤に関する諸項目

本会発足以来、27回にわたり、毎年実施してきたシンポジウムのテーマならびに各演題と演者は別添資料に記載したが、それらを項目別一括、分類して示すと、下記a)～d)の通りである。それぞれの項目には開催順を〔 〕内に示し、またその内容が記載された会報の号数を()内に示した。なお第1～第5回のシンポジウムは会報の発行以前に実施されたので、別添資料に記載した冊子等に内容要旨を掲載の上会員に配布した。

a) 家畜(家禽を含む)魚類等由来菌の薬剤感受性ないし耐性(Rプラスミドを含む)の問題

(1) 家畜由来菌の薬剤耐性の現状全般〔第1回〕

(2) 家畜由来大腸菌の薬剤耐性〔第2回、第3回、第4回、第5回、第8回(第3号)、第24回(第19号)、第26回(第21号)の7回〕
(注：第3、8回はRプラスミドを含む)

(3) 家畜由来サルモネラの薬剤耐性〔第2回、第3回、第5回、第24回(第19号)、第27回(第22号)の5回〕

(4) 家畜由来ブドウ球菌の薬剤耐性等〔第2回、第13回(第8号)、第24回(第19号)、第27回(第22号)の4回〕(第13回は*S. hyicus*、第27回は食肉由来株を含む)

(5) 家畜由来マイコプラズマの薬剤感受性〔第6回(第1号)、第11回(第6号)の2回〕

(6) 家畜由来ヘモフィルス(アクチノバチルス)及びパスツレラの薬剤感受性〔第7回(第2号)、第15回(第10号)、第16回(第11号)、第19回(第14号)の4回〕(注：第19回はRプラスミドを含む)

(7) *Bordetella bronchiseptica* のR因子〔第1回〕

(8) *Treponema (Serpulina) hyodysenteriae* の薬剤感受性〔第9回(第4号)、第11回(第6号)の2回〕

- (9) *Clostridium*, *Bacteroidis*の薬剤感受性〔第10回(第5号)〕
- (10) 豚由来レンサ球菌の薬剤感受性〔第13回(第8号)〕
- (11) 魚類由来菌の薬剤感受性と耐性〔第18回(第13号)〕
- (12) 家畜の耐性菌(特にRプラスミド保有菌)とその対策の現状〔第5回〕
- (13) 薬剤耐性コクシジウムの感受性への復帰〔第25回(第20号)〕
- b) 畜産物中の残留抗生物質の検出法〔第18回(第13号)〕なお本件に関しては後出2.(3)も参照。
- c) 抗菌剤の臨床応用と問題点(感染症別, 動物別)
 - (1) 臨床の立場からみた耐性菌問題(大, 小動物)〔第3回〕
 - (2) 馬伝染性子宮炎の化学療法(*Taylorella equigenitalis*の薬剤感受性を含む)〔第9回(第4号)〕
 - (3) 臨床現場における抗菌性物質の応用の現状と展望(乳牛, 豚, 小動物, 魚類)〔第21回(第16号)〕
 - (4) 牛のサルモネラ症と抗菌剤による治療〔第23回(第18号)〕
 - (5) 抗菌剤の適正な使用法(対象: 牛乳房炎, 牛 *Salmonella* Typhimurium 感染症, 魚病, 鶏のコクシジウム症)〔第25回(第20号)〕
 - (6) 豚の浮腫病に対する抗菌剤の応用(人の大腸菌O 157感染症の治療を含む)〔第26回(第21号)〕
 - (7) 抗菌性物質の腸内細菌叢に及ぼす影響〔第10回(第5号)〕
- d) 最近開発された家畜の細菌感染症治療用抗菌性物質の基礎面と応用面に関する問題
 - (1) 家畜の細菌性感染症治療薬の基礎面と臨床面(フマル酸チアムリンほか5剤)〔第12回(第7号)〕
 - (2) 産業家畜の細菌感染症用治療薬の基礎面と応用面(セデカマイシンほか7剤)〔第14回(第9号)〕
 - (3) セフェム系及びマクロライド系抗生物質の基礎と応用(セフェム系に関する総説とセファロニウムほか3剤)〔第17回(第12号)〕
 - (4) 動物用新キノロン系合成抗菌剤の基礎と応

- 用(ニューキノロン4剤)〔第20回(第15号)〕
- (5) 産業動物用抗菌性物質の基礎と応用(フロロフェニコールほか3剤)〔第22回(第17号)〕

2. 本会のシンポジウムに合わせて実施した特別講演の演題項目

本会が毎年開催してきたシンポジウムの際、これと同時に会員の知識、技術の向上に資するため、抗菌剤に関し、その作用や耐性菌、畜産物への残留、臨床応用などの諸問題について、毎回特別講演を実施してきた。その演者は各分野の専門家(医学, 水産なども含む)に依頼した。

年度別の演題は別添資料の通りであるが、それらを項目別に一括・分類して示すと、以下の通りである。なお、第18回以降の特別講演要旨は会報に記事が掲載されており、〔 〕内に特別講演の開催順、()内には掲載された会報の号数を示した。また、会報に記載以前の分で、演者から講演願ったものとはほぼ同じ内容の記事の別刷りの提供を受けた場合は、著者の許可を得て増刷りを作製し、後日全会員に配布した。

- (1) 細菌の薬剤耐性の遺伝学的、生化学的機構に関するもの〔第1回, 第7回, 第8回, 第19回(第14号)の4回〕
- (2) 薬剤耐性菌の疫学(医学を含む)に関するもの〔第5回, 第26回(第21号), 第27回(第22号)の3回〕
- (3) 畜産物への薬剤残留(検査法を含む)に関するもの〔第2回, 第11回, 第16回, 第25回(第20号)の4回〕
- (4) 抗菌剤の体内動態等に関するもの〔第6回, 第12回, 第15回, 第23回(第18号)の4回〕
- (5) 特定感染症に対する抗菌剤, 抗原虫剤の応用に関するもの〔第9回, 第22回(第17号), 第24回(第19号), 第27回(第22号)の4回〕
- (6) 魚病(免疫を含む)に関するもの〔第13回, 第18回(第13号)の2回〕
- (7) 新薬(医薬を含む)開発に関するもの〔第15回(第10号), 第20回(第15号), 第21回(第16号)の3回〕
- (8) その他(抗菌剤に関する使用規制, 現状,

将来展望を含む)〔第4回, 第8回, 第10回, 第25回(第10号), 第26回(第21号), 第27回(第22号)の6回〕

3. 動物由来各種細菌の薬剤感受性測定法の検討ならびに技術基準の作成

獣医学領域における細菌の薬剤感受性測定法を標準化することは、本会の重要な使命の一つである。そこで、本会では、下記の通り、主要な動物由来の菌種に関し、薬剤感受性測定法の検討と標準化を実施した(それぞれの詳細は各項目に示した会報掲載記事を参照)。なおこの標準化に際しては、各専門の方々のご協力を得た。

- (1) 家畜由来の細菌(大腸菌, サルモネラ, ブドウ球菌等)の薬剤感受性測定法(昭和50年に制定されたものを平成9年に改定)(会報第18号)
- (2) 家畜由来マイコプラズマ及びウレプラズマの薬剤感受性測定法〔第11回, (会報第6号)〕
- (3) 鶏由来マイコプラズマの薬剤感受性測定法〔第11回, (会報第6号)〕
- (4) 豚由来マイコプラズマの薬剤感受性測定法〔第11回, (会報第6号)〕
- (5) *Pasteurella multocida*の薬剤感受性測定法〔第16回, (会報第11号)〕
- (6) *Haemophilus (Actinobacillus) pleuropneumoniae*の薬剤感受性測定法〔第15回, (会報第10号)〕
- (7) *Treponema (Serpulina) hyodysenteriae*の薬剤感受性測定法〔第11回, (会報第6号)〕

4. 動物用抗菌剤の臨床試験実施基準(試案)(I)(II)の作成

本件に関し、各分野の専門家12名からなる検討委員会を設置し、約2年半(16回)にわたる検討を重ね、その成果を(I)として、豚及び牛の細菌性肺炎に対する抗菌剤の臨床試験実施基準、(II)として、牛の細菌性乳房炎に対する抗菌剤(泌乳期用乳房注入剤及び乾乳期用乳房注入剤)の臨床試験実施基準としてまとめ、それぞれ会報第18号

及び第19号に掲載した。なお本基準作成中に、農林水産省からこの指針を国際基準の作成のための参考資料として検討されたい旨の要望があった。

5. 動物由来の各種細菌の薬剤感受性及び耐性菌に関する文献、情報及び菌株の収集、及び文献リストの編集・配布(文献リストの編集・配布は平成11年度まで毎年実施)

6. 抗菌剤の畜・水産物への残留に関する文献、情報の収集及び菌株の収集及び文献リストの編集・配布(文献リストの編集・配布は平成11年度まで毎年実施)

7. 抗菌剤の動物感染症に対する有効性に関する文献、情報の収集及び文献リストの編集・配布(文献リストの編集・配布は平成11年度まで毎年実施)

8. 国内外における動物用抗菌性物質・合成抗菌剤の略語表作成と増補・改定(毎年増補改訂の上、会報末尾に記載)

9. 関連学会及び専門家との交流

- 1) 獣医学、水産学並びに医学の各学会の関連学問の専門家と連携をとり、必要に応じて特別講演や助言を依頼している。
- 2) 抗菌剤に関する情報収集その他については(財)日本抗生物質学術協議会から、多大のご協力をいただいている。
- 3) 本会会報を毎年、各獣医学関係大学、関係研究機関、農水省及びChemical Abstract編集部に送付している。

(別添資料)第1回～27回シンポジウムにおいて実施した特別講演とシンポジウムの演題の集録

第1回：昭和49年4月8日(於 日本獣医畜産大)

特別講演：薬剤耐性菌とR因子(東京医歯大
中谷林太郎)

シンポジウム：

(本シンポジウムの要旨は獣医畜産新報 No.621
(p 21),623(p 32),624(p 15),625(p 17), 昭和49
年に掲載)

- 1) 畜産における抗生物質の現状 (二宮幾代治)
- 2) 家畜における耐性菌の現状 (高橋 勇)
- 3) *B.bronchiseptica*のR因子 (寺門誠致)

第2回：昭和50年4月7日(於 都市センター)

特別講演：抗生物質の畜産物中への残留につ
いて (畜試 吉田 実)

シンポジウム：

- 1) 輸入食肉由来のサルモネラとその薬剤耐性
について (鈴木 昭)
- 2) 日本およびヨーロッパにおける家畜由来大
腸菌などの薬剤耐性について (柏崎 守)
- 3) 生乳由来ブドウ球菌の薬剤耐性について
(春田三佐夫)
- 4) 牛乳房炎由来ブドウ球菌の薬剤感受性につ
いて (久米常夫)

(注：この回の要旨は欠)

第3回：昭和51年4月8日(於 食糧会館)

シンポジウムⅠ：臨床の立場からみた耐性菌
問題

話題提供 (原 茂)

追加発言

- 1) 大動物臨床の立場から (佐藤輝夫)
- 2) 小動物臨床の立場から (小暮規夫)
- 3) 基礎的問題 (久米常夫, 橋本和典)

(注：シンポジウムⅠ要旨は欠)

シンポジウムⅡ：家畜由来サルモネラ及び大
腸菌における薬剤耐性の特性

(本シンポジウムⅡの要旨はモダンメディア
22(6), 昭和51年に掲載)

- 1) 豚より分離された大腸菌の各種薬剤に対す

る感受性について (永井 裕)

- 2) 野外における薬剤耐性大腸菌の汚染状況調
査—特に豚と養豚農家及び非農家の人との
比較— (鈴木 要)
- 3) わが国における家畜および鶏由来サルモネ
ラの薬剤耐性について (高橋 勇)
- 4) R因子の型別, 牛のネズミチフス菌感染症
の疫学との関連 (寺門誠致)

第4回：昭和52年4月2日(於 麻布獣医大)

特別講演：抗菌剤の現状と将来 —畜産との
関連において— (日本抗生学協 八木澤行正)

シンポジウム：今後の抗菌剤の野外応用上の
問題点—飼料安全法の施行にともなって—

(本シンポジウムの要旨は小冊子として会員に
配布)

- 1) 本邦における耐性大腸菌の分布 (永井 裕)
- 2) 鶏病の立場からⅠ (吉村昌吾)
- 3) 鶏病の立場からⅡ (牧田正義)
- 4) 豚病の立場からⅠ (石井泰明)
- 5) 豚病の立場からⅡ (鈴木 守)

第5回：昭和53年4月4日(於 食糧会館)

特別講演：医学領域における耐性菌の現状と
対策 (慶応大 富岡 一)

シンポジウム：家畜の耐性菌とその対策に関
する研究の現状 —特にR因子保有菌に対す
る若干の薬剤の作用について—

(本シンポジウムの要旨は小冊子として会員に
配布)

- 1) 家畜における大腸菌, サルモネラの耐性の
現状の紹介と問題点 (高橋 勇)
- 2) プラスミド保有菌に対するマカルボマイシ
ンの作用について (福安嗣昭)
- 3) R因子保有菌に対するフラボフォスフォリ
ポールの作用について —最近の研究報告
の紹介— (赤羽正隆)
- 4) R因子保有菌に対するケベマイシンの選択
的抗菌力 (寺門誠致)

- 5) Pipemidic acid 関連化合物のプラスミッド伝達阻害作用 (中村信一)

第6回：昭和54年4月4日(於 日本大)

特別講演：家畜における抗生物質の体内吸収と分布について (動薬検 米沢昭一)

シンポジウム：家畜のマイコプラズマの薬剤感受性並びに予防、治療に関する最近の知見 (本シンポジウムの要旨は会報第1号に掲載)

- 1) 鶏由来マイコプラズマの薬剤感受性について (高橋 勇)
- 2) 豚由来マイコプラズマの薬剤感受性について (国安主税・高橋清人)
- 3) 牛由来マイコプラズマの薬剤感受性について (橋本和典・木島真人)
- 4) 鶏由来マイコプラズマ症の抗生物質による予防、治療に関する最近の知見—特に *Mycoplasma gallisepticum* 及び大腸菌による単独または、混合実験感染系ヒナを用いた実験成績を中心として— (村田昌芳)

第7回：昭和55年3月28日(於 東京農工大)

特別講演：細菌の薬剤感受性および耐性の生化学的機構について (東大応微研 田中信男)

シンポジウム：家畜・鶏由来のヘモフィルスおよびバツレラの薬剤感受性と問題点 (本シンポジウムの要旨は会報第2号に掲載)

- 1) 豚のヘモフィルス感染症と豚由来ヘモフィルスの薬剤感受性 (加藤和好)
- 2) 豚の胸膜肺炎由来の *Haemophilus pleuropneumoniae* 及び牛の胸膜肺炎由来の *Pasteurella haemolytica* type A の薬剤感受性について (尾田 進)
- 3) 牛および豚由来の *Haemophilus* と *Pasteurella* の薬剤感受性について (鈴木達郎)
- 4) 鶏由来ヘモフィルス・パラガリナルムの薬剤感受性について (内田幸治・原田良昭)

第8回：昭和56年4月9日(於 食糧会館)

特別講演：

- 1) Rプラスミドの基礎 (東大医科研 吉川昌之助)
- 2) 家畜に対する抗生物質の使用規制について

(農水省 緒方宗雄)

シンポジウム：家畜における耐性大腸菌の疫学 (本シンポジウムの要旨は会報第3号に掲載)

- 1) 飼料安全法施行前後の鶏・豚糞便由来大腸菌の薬剤耐性とRプラスミド (金城俊夫)
- 2) 鶏の加齢および飼育環境の変化に伴う耐性大腸菌の消長 (中村政幸)
- 3) 若齢動物(ヒナ, 子豚, 子牛および若齢児)から分離された大腸菌の薬剤耐性と接合性Rプラスミドの検出 (金井 久)
- 4) と畜場における家畜とその処理業者等の糞便由来大腸菌の薬剤耐性とR因子について (斉田 清)
- 5) 環境由来大腸菌の薬剤耐性とRプラスミド (佐藤儀平)
- 6) 家畜の症例由来大腸菌の薬剤耐性とRプラスミド (高橋 勇)

第9回：昭和57年4月4日(於 麻布大)

特別講演：鶏のロイコチトゾーン病とその化学療法 (家畜衛試鶏病支場 秋葉和温)

シンポジウム：

(本シンポジウムの要旨は会報第4号に掲載)

I. 豚赤痢の化学療法上の基礎的問題

- 1) 豚赤痢の細菌学的検討と化学療法について (足立吉数)
- 2) 全国各地から分離された *Treponema hyodysenteriae* の若干の代表的薬剤に対する感受性について (内田幸治)
- 2) *Treponema hyodysenteriae* の薬剤感受性：試験管内耐性獲得試験を中心として (北井和久)

II. 馬の伝染性子宮炎の化学療法上の基礎的問題

- 1) 北海道日高地方における馬の伝染性子宮炎の発生状況 (国安主税)
- 2) 馬伝染性子宮炎(CEM)の臨床と化学療法 (宇野 駿)
- 3) 馬伝染性子宮炎起因菌“*Haemophilus equigenitalis*”の薬剤感受性 (杉本千尋)

第10回：昭和58年4月2日(於 日大会館)

特別講演：家畜における腸内細菌総叢の意義

(東大 光岡知足)

シンポジウム：

(本シンポジウムの要旨は会報第5号に掲載)

I. 嫌気性菌の薬剤感受性

- 1) 小動物病巣から分離される *Clostridia*, *Bacteroides* およびその他の嫌気性菌の薬剤感受性 (寺田 厚)
- 2) ニワトリおよびウシの臨床材料から分離された *Clostridium septicum* の薬剤感受性 (白坂昭治)

II. 抗菌性物質の腸内細菌叢に及ぼす影響

- 1) 抗菌剤の飼料添加と家畜の腸内細菌の薬剤感受性 (阪野哲也ほか)
- 2) 鶏腸内細菌叢に及ぼす抗生物質投与の影響とその意義 (大宅辰夫)

第11回：昭和59年4月9日(於 食糧会館)

特別講演：畜産物における抗菌性物質の残留
(摂南大 高島英伍)

シンポジウム：

(本シンポジウムの要旨は会報第6号に掲載)

I. マイコプラズマの薬剤感受性試験法の検討

- 1) 2, 3の家畜由来マイコプラズマおよびウレプラズマの薬剤感受性測定法について (清水高正ほか)
- 2) 豚由来マイコプラズマのMIC測定法に関する検討 (山本孝史)
- 3) 鶏由来マイコプラズマの薬剤感受性測定法について (村田昌芳)
- 4) 鶏由来マイコプラズマの薬剤感受性試験法の検討 (内田幸治ほか)

II. 豚赤痢トレポネーマの薬剤感受性試験法

- 1) 抗菌性物質に対する *Treponema hyodysenteriae* の試験管内感受性試験方法についての若干の検討 (内田幸治ほか)
- 2) *Treponema hyodysenteriae* に対する抗菌剤のMIC測定法に関する検討—特に接種菌液調製における考察— (山崎俊幸)
- 3) *Treponema hyodysenteriae* の薬剤感受性試験法の検討 (足立吉数)

第12回：昭和60年4月8日(於 日本青年会館)

特別講演：感染症と薬物体内動態 (東京農工大 吐山豊秋)

シンポジウム：最近開発された家畜の細菌性呼吸器病および消化器病用抗菌性物質の基礎面と応用面

(本シンポジウムの要旨は会報第7号に掲載)

- 1) フマル酸チアムリンについて (近藤房生)
- 2) スペクチノマイシンについて (片江宏巳)
- 3) ドキシサイクリンについて (平井輝生)
- 4) スルファモノメトキシシとオリメトプリムの合剤について (高島俊弘)
- 5) スルファメトキサゾール・オリメトプリム合剤 (中元弘次)
- 6) ピコザマイシンについて (岡野圭介)

第13回：昭和61年4月6日(於 日本獣医畜産大学)

特別講演：養殖魚類の細菌感染症と化学療法上の問題点 (日獣大 窪田三郎)

シンポジウム：豚における最近のグラム陽性菌の感染症と原因菌の薬剤感受性

(本シンポジウムの要旨は会報第8号に掲載)

- 1) 豚のレンサ球菌感染症と原因菌の血清型 (東 量三)
- 2) 豚由来レンサ球菌の薬剤感受性 (富永 潔)
- 3) 豚の滲出性表皮炎症原因菌 (*Staphylococcus hyicus* subsp. *hyicus*) の性状と薬剤感受性 (清水 晃)
- 4) 豚の滲出性表皮炎症の病性と原因菌 (*S. hyicus* subsp. *hyicus*) の薬剤感受性 (田原 健)

第14回昭和62年4月1日(於 日本獣医畜産大学)

シンポジウム：最近開発された産業家畜の細菌感染症用抗菌性物質の基礎面と応用面

(本シンポジウムの要旨は会報第9号に掲載)

- 1) セデカマイシンについて (生川憲明)
- 2) ゲンタマイシンについて (佐々木 滋)
- 3) アプラマイシンについて (清水良浩)
- 4) ホスホマイシンについて (武田植人)
- 5) メシリナムについて (高橋辰夫)
- 6) アモキシシリンについて (松原清夫)
- 7) ジョサマイシンについて (横地良正)

8) ナノオマイシンAについて (島田健次郎)

第15回:昭和63年5月7日(於 日本獣医畜産大学)
特別講演:

1) 最近における抗菌性物質の開発上のトピック (日本抗生学協 八木澤守正)

(本講演の要旨は会報第10号に掲載)

2) 抗生物質のSub-MICsと臨床上の諸問題について (慈恵医大 松本文夫)

シンポジウム:豚由来の*Haemophilus pleuropneumoniae*の薬剤感受性

(本シンポジウムの要旨は会報第10号に掲載)

1) 豚ヘモフィルス感染症の最近の動向と分離菌株の薬剤感受性 (久米勝巳)

2) 豚の肺病変から分離された*Haemophilus (Actinobacillus) pleuropneumoniae*の血清型および薬剤感受性 (鈴木祥子)

3) 最近分離された*Haemophilus (Actinobacillus) pleuropneumoniae*の血清型と薬剤感受性 (山本孝史)

4) 豚由来*Haemophilus (Actinobacillus) pleuropneumoniae*の薬剤感受性と肺炎に対するオキシテトラサイクリンの効果 (阪野哲也)

第16回:平成元年4月5日(於 日本獣医畜産大学)
特別講演:食肉中の抗菌性物質の残留問題について 一米国の例を中心として (日獣大小野浩臣)

シンポジウム:豚由来*Pasteurella multocida*の薬剤感受性

(本シンポジウムの要旨は会報第11号に掲載)

1) *Pasteurella multocida*の血清型別に関する研究の現状ならびにわが国の家畜・家禽における本菌感染症の動向 (澤田拓士)

2) 呼吸器症状を示す牛・豚由来*Pasteurella multocida*および*Pasteurella haemolytica*株の薬剤感受性 (内田幸治)

3) 家畜由来*Pasteurella multocida*の薬剤感受性,特にピリドンカルボン酸系薬剤と汎用抗菌性物質に対する感受性の比較 (高橋 勇)

4) 豚由来*Pasteurella multocida*の薬剤感受性 (阪野哲也)

第17回:平成2年4月4日(於 日本獣医畜産大学)
シンポジウム:最近開発されたセフェム系およびマクロライド系抗生物質の基礎と応用面 (本シンポジウムの要旨は会報第12号に掲載)

1) 第1~第3世代のセフェム系抗生物質の抗菌力の特徴 (八木澤守正)

2) セファロニウムについて (遠藤俊夫)

3) セファゾリンについて (小松孝義)

4) ミロサマイシン(別称, ミポラマイシン)について (渡辺典夫)

5) アセチルイソバレリルタイロシン(酢酸イソ吉草酸タイロシン) (奥山大策)

第18回:平成3年4月1日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第13号に掲載)

特別講演:魚類の免疫機構について (宮崎大北尾忠利)

シンポジウム:

I. 魚病由来菌の薬剤感受性と耐性

1) 養殖魚介類の真菌症と魚病由来真菌の薬剤感受性について (畑井喜司雄)

2) 魚類由来菌の薬剤耐性について (青木 宙)

II. 畜・水産物中の残留抗菌性物質の検出法

1) バイオアッセイによる食肉中の残留抗菌性物質の簡易系統別検査法 (神保勝彦)

2) 畜・水産物中の残留抗菌性物質の検出法—免疫学的検出法について— (伊佐山康郎)

第19回:平成4年4月5日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第14号に掲載)

特別講演:近年におけるMRSA(methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*)研究の動向と薬剤使用状況の関連 (出口浩一 東京総合臨床検査センター)

シンポジウム:豚呼吸器病由来病原菌の薬剤耐性とプラスミド

1) 1989年~91年に分離された*Actinobacillus pleuropneumoniae*の血清型と薬剤感受性 (福安嗣昭)

- 2) *Actinobacillus pleuropneumoniae* 2型菌の薬剤耐性とプラスミド (川原一芳)
- 3) *Haemophilus parasuis* の薬剤感受性とプラスミドについて (森腰俊亨)
- 4) 豚の鼻腔由来 *Pasteurella multocida* の薬剤感受性とプラスミド (牛島稔大)

第20回：平成5年4月5日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第15号に掲載)

- 特別講演：ヒト医療用ニューキノロンの展開
(日本抗生学協 八木澤守正)
- シンポジウム：最近動物用として開発された新キノロン系合成抗菌剤の基礎と臨床
- 1) オフロキサシンについて (高嶋俊弘)
 - 2) エンロフロキサシンについて (中村暁美)
 - 3) メシル酸ダノフロキサシンについて (内田幸治)
 - 4) ベノフロキサシンについて (末永 格)

第21回：平成6年4月5日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第16号に掲載)

- 特別講演：我国における動物用抗菌性薬物の新薬と開発の動向 (畜安研 吐山豊秋)
- シンポジウム：臨床現場における抗菌性物質の応用 ―現状と展望―
- 1) 乳牛の感染症とその治療 (星 欽弥)
 - 2) 豚の感染症とその予防・治療 (日高秀造)
 - 3) 小動物臨床における抗菌性物質投与の実際 (鷺巢月美)
 - 4) 魚の感染症とその治療 (林 不二雄)

第22回：平成7年4月3日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第17号に掲載)

- 特別講演：牛乳房炎由来菌種とその諸性状―薬剤感受性を中心に― (ファイザー製薬 松永俊幸)
- シンポジウム：最近開発された産業動物用抗菌性物質の基礎と応用
- 1) フロルフェニコールについて (植田祐二)

- 2) チルミコシンについて (中元弘次)
- 3) アスポキシリンについて (乾 隆志)
- 4) オルビフロキサシンについて (松本修治)

第23回：平成8年4月5日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第18号に掲載)

- 特別講演：感染症に対する抗菌薬の使用法：特に抗菌薬の組織浸透性と post antibiotic effect について (東京農工大 小久江栄一)
- シンポジウム：牛のサルモネラ症と抗菌剤による治療
- 1) 乳用雄牛に発生した *Salmonella* Dublin 感染症と *Salmonella* Bredeney 保菌乳用牛群における対策 (富嶋 明)
 - 2) 搾乳牛に発生した *Salmonella* Typhimurium 感染症と対策 (木暮幸博)
 - 3) 搾乳牛に発生したサルモネラ症とその衛生対策 (平田文吾)
 - 4) 搾乳牛群におけるサルモネラ症 (矢田谷 健)

第24回：平成9年4月5日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演の要旨は会報第19号に掲載)

- 特別講演：
- 1) アメリカ腐蛆病の防除に有効な薬物 (畜安研 吐山豊秋)
 - 2) 最近における抗菌剤の使用状況と大腸菌、サネモネラ及び黄色ブドウ球菌に対する薬剤耐性 (動薬検 石丸雅敏)

第25回：平成10年4月25日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第20号に掲載)

- 特別講演：
- 1) 畜水産食品中の残留抗生物質の微生物学的検査法 (都衛研 神保勝彦)
 - 2) 動物用抗菌剤をめぐる国際的な動き (日本動物薬事協 大島 慧)
- シンポジウム：抗菌剤の適正な使用法
- 1) 牛の乳房炎治療法における抗菌剤とレバミゾールおよびオキシトシンの併用効果 (中川巴津英)

- 2) 搾乳牛に発生した *Salmonella* Typhimurium 感染症と生菌剤投与による清浄化対策 (小茂田匡央)
- 3) 水産用抗菌剤の使用実態 (新川俊一)
- 4) 薬剤耐性コクシジウムの感受性への復帰 (斎藤康秀)

第26回:平成11年4月17日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第21号に掲載)

特別講演:

- 1) 動物用抗菌剤をめぐる最近の国際的な動き (日本動物薬事協 大島 慧)
- 2) 動物における薬剤耐性菌 —医療分野との関わり— (動薬検 吉村治郎)

シンポジウム:豚の浮腫病(VTEC感染症)に対する抗菌剤の応用について

- 1) 豚の浮腫病とは (中澤宗生)
- 2) 人の腸管出血性大腸菌O157感染症の治療 (相楽裕子)
- 3) 管内の養豚場における浮腫病の集団発生病

—発生状況と予防対策— (渡辺一夫)

- 4) 一養豚場における浮腫病の発生と対策 (長尾ゆかり)
- 5) 豚由来毒素産生性大腸菌の薬剤耐性 (大谷利之)

第27回:平成12年4月22日(於 日本獣医畜産大学)
(本特別講演およびシンポジウムの要旨は会報第22号に掲載)

特別講演:

- 1) 動物用抗菌剤をめぐる最近の国際動向と薬剤耐性菌調査 (動薬検 木島まゆみ・田村 豊)
- 2) 牛の細菌性呼吸器病に対する抗菌剤の応用 (山形共済 加藤敏英)

シンポジウム:最近公衆衛生上注目される動物由来耐性菌

- 1) *Salmonella* Typhimurium DT104とわが国の現状について (鮫島俊哉)
- 2) 動物および食肉由来メチシリン耐性ブドウ球菌 (清水 晃)